The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青年期のメンタルヘルスに影響を及ぼすエゴ・レジリエンスおよび心的外傷後成長に関する研究/青年期のメンタルヘルスに関する調査（１）：高校生の抑うつと自殺念慮および心的外傷後ストレス症状の実態/青年期のメンタルヘルスに関する調査（２）：エゴ・レジリエンスおよび心的外傷後成長のメンタルヘルスとの関係
Author(s)	小島, 雅彦
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52078
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　小　島　雅　彦　）	
論文題名	青年期のメンタルヘルスに影響を及ぼすエゴ・レジリエンスおよび心的外傷後成長に関する研究 （・青年期のメンタルヘルスに関する調査（１） －高校生の抑うつと自殺念慮および心的外傷後ストレス症状の実態－ ・青年期のメンタルヘルスに関する調査（２） －エゴ・レジリエンスおよび心的外傷後成長のメンタルヘルスとの関係－）

論文内容の要旨

〔　目　　的　〕

いくつかの大規模疫学調査による先行研究から、青年期である高校生のメンタルヘルスにおいて、３割程度が抑うつ状態にあり、また自殺念慮も６％程度が持っていることが明らかにされてきた。これらの結果は、予想をはるかに上回る結果であったため教育現場に大きな衝撃を与えたが、青年期には進路の選択、いじめを含む人間関係、諸活動の増加に伴うトラブルや事故に遭遇するリスクの増加など、ストレスフルな状況下にあることは明白である。

そこで本研究では、現代の高校生の抑うつや心的外傷後ストレス症状（PTSS）の実態の把握、およびネガティブライフベント（NLE）に対する防御因子として知られているレジリエンスや、NLE経験後の精神的成長との関連性を明らかにするために、福井県在住の一般高校生を対象に、メンタルヘルスに関する大規模調査を行った。

〔　方法ならびに成績　〕

福井県下の高校生男女1,095名（不登校生徒を除く）を対象に無記名自己記入式の質問紙調査を実施した。主な質問項目は、１）Depression Self-Rating Scale for Children（DSRS-C）抑うつ尺度による現在の抑うつ状態、２）現在のPTSS、３）Ego-Resiliency 89（ER89）尺度によるエゴ・レジリエンス、４）心的外傷後成長（PTG）、５）過去に受けたNLEの種類とストレス強度である。回収された質問紙のうち、回答に不備のない938名を分析対象とした。

まずNLEについての記述統計では、男子では「入試や学業」に関すること、女子では「友人や異性との関係」を挙げた割合がそれぞれ３割余りであり、一番多いことが分かった。また、抑うつ状態の割合は約21%、自殺念慮を持つ割合は約6%で、性差は認められなかった。抑うつ状態の割合は、先行研究の結果と比較しても、およそ10ポイント低い値であった。またPTSSについては、カットオフ値以上の割合は35%であり、成人を対象とした研究結果よりも４ポイントほど低い値であった。以上の結果より、福井県在住の高校生のメンタルヘルスにおいて、何らかの地域特性（例えば、平均世帯人員数など）が抑うつ防御因子として機能している可能性が示唆された。

次に、NLEに対する抑うつ状態や心的外傷後ストレス症状（PTSS）、およびレジリエンスやPTGとの関連性を明らかにするために、共分散構造分析を用いて、青年期における精神的成長モデルの構築を行った。その結果、NLEからのストレス強度は、ERに対して直接的影響は及ぼさず、PTGを介して間接的にERを高める可能性が示唆された。また、PTGやERは抑うつの防御因子として機能していたが、PTSSには影響を及ぼしていないことが明らかとなった。NLEから高いストレスを受けるだけでなく、それを如何に受け取るかが、PTGやERを高める上で重要である可能性が示唆された。今後、PTGを促すような教育支援・心理相談の在り方を模索することが重要と考えられた。

〔　総　　括　〕

本研究結果から、NLEに対する感受性にはイベントごとの性差が存在すること、また地域特性が防御因子として機能しうる可能性が示唆された。また、青年期における精神的成長モデルを構築した結果、NLEからのストレス強度は、ERに対して直接的影響は及ぼさず、PTGを介して間接的にERを高めること、PTGやERは抑うつの防御因子として機能していたが、PTSSには影響を及ぼしていないことが明らかとなった。

今後の課題としては、NLEの種類と精神的成長の関連性を明らかにするために、NLEについて基準に基づいた分類を行い、NLE種ごとの精神的成長モデルを構築する必要性が挙げられる。今後の展望としては、本研究結果を踏まえ、毎日登校している高校生徒においても、生徒たちの心身の健康状態を定期的にチェックし、かつ、避けられないNLEを経験した後においても、PTGを促すような教育相談支援システムの構築が必要であると考えられた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　小島雅彦　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主　査　教　授	中川彰子
	副　査　教　授	安倍博
	副　査　特任講師	和久田学

論文審査の結果の要旨

本研究は申請者が勤務するある県の高校生の抑うつ、心的外傷後ストレス症状の実態を明らかにするために質問紙調査及び統計解析をおこない検討を加えたものである。また、いじめや被虐待等のネガティブなライフイベント、それによる心的外傷後ストレス症状（posttraumatic stress symptoms;PTSS）、ストレス状況でも健全なメンタルヘルスを維持する機能であるエゴレジリエンス、心的外傷後成長との関係を明らかにしようとしたものである。

中でも、これまで本邦高校生を対象にした研究報告のなかったPTSSを評価したことは特筆に値する。日本語版Impact Event Scale-Revised(IES-R)を用いた本研究により、およそ３人に1人以上の高校生がPTSS症状（再体験、回避、過覚醒）を有していることが明らかとなった。また、ネガテイブライフイベントと心的外傷後成長の間には直接の関係が認められなかったが、たとえば、認知の変化のようなものが介在することが予想された。学校の教育現場において、ストレスレベルの高いネガティブライフイベントを経験した生徒の認知の変容を図り、心的外傷後成長を促すような教育相談の在り方を模索する重要性が示唆された。

調査対象者のサンプリングの問題、それぞれの因子の定義や因子間の相関については若干の検討の余地を残すが、そのことを考察できており今後の研究の方向性も述べられている。同意を得るのが困難である教育現場でほぼ1000名という対象者を集めて調査した研究であり、高校生のメンタルヘルス研究においての新規性も認められることを鑑み、学位の授与に値すると考える。